当報告の内容は著者の著作物です。

情報資源利用研究センター主催・基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」共催：国際ワークショップ
平成 25 年 1 月 24 日（木曜日）14:00～18:00　AA 研 301 室

# 「スース地方の伝統的なベルベル歌謡における宗教的な価値と教え：省察すべき要素群」

ラハセン・ダーイフ
（歴史資料研究センター／フランス国立科学研究センター）

モロッコ南方のスースの平原で，最後まで残っていた伝統的な歌い手たち（ルワイス）は，祖先と同じ役割，例えばハムー・オー・タルブのような彼らの先駆者と同様，教養のない村の住人たちと，知と権力のエリートとの間のつながりを強固にするという役割に忠実であった。しかしこの役割は，都会のルワイスという波の到来によってかすんでしまい，またグループによる歌い手たちの出現でほぼ消滅した。

本報告では，それらの歌い手たちが，クルアーンの暗唱者（スースにおける意味ではフカハー）や宗教指導者（ウラマー）が与えていた宗教意識と完全に同一化された知識範囲との間で保っていた関係を取り上げる。そして，この関係を媒介として，ベルベルのタシュルヒート語で作られた，宗教や倫理的・精神的価値観が大きな位置を占めている彼らの叙情的な詩や歌（アマルグ）が内包する宗教的表明の理解に努める。

それらの詩の全部が宗教的なテーマに捧げられてはいないにしろ，ルハッジ・ベルイード，ブー・バクル・アンシャード，ムハンマド・ブー・ドゥラーのような優れた歌い手たちは，各々の感性とリズムによってはいるものの，彼らのすべてが様々な主題について宗教的な源から論拠を汲み上げることで表現している。従って，彼らの歌で扱われているテーマがどのようなものであれ，宗教というプリズムは不変であり，それによってこれらのルワイスは彼らのテーマに取り組んでいる。つまり，宗教という次元が，共同体のために職務を果たす清廉な詩人という地位を強固にすることに与っているのである。